

読書

集合住宅と日本人

竹井 隆人著

本書は、新進気鋭の政治学者が日本社会の「共同性」という問題をめぐって集合住宅を組上にのせて論じたもので、その論点は、日本の左翼論壇が唱和する「コミュニティ」にたいする批判と、それにかわるべきものとして居住者を主体とした自治組織である「私的政府」というものの提案である。

ここで「コミュニティ」あるいは著者が批判する「原理主義的コミュニティ」と「私的政府」との違いは、たとえばおなじ地域集団でもそこにみられる共同性の用件である信頼というものに相違のあることだ。前者は多く「顔見知り」

のあいだでの信頼であるのに、後者は「見知らぬ人」のあいだの信頼を主とする。そして顔見知りのあいだの信頼は、ふだんはともかく、阪神淡路大震災のようなときにはしばしば「損傷したマンションの建替えと補修をめぐって感情



集合住宅と日本人

(平凡社・二、八〇〇円)

▼たけい・たかひと 68年生まれ。放送大学非常勤講師、政府系金融機関職員。著書に『集合住宅デモクラシー』など。

居住者主体の「私的政府」提案

的対立になる」という。

これにたいし見知らぬ人を主とする「私的政府」での信頼は成員内での「ルールの尊重」がそれを保証する。その萌芽を、著者が建設にたずさわったいくつかのコーポラティブ・ハウスにみる。それは、ディベロッパーが主体となつて建設する分譲マンションではなく、入居予定者が組合をつくって建設する集合住宅であるが、その建設過程でときに入居予定者が百回ぐらいいも会合をもつ。

そういう経験を基盤にして、入居後も数百戸規模の集合住宅の住人がグループにわかれてさまざまな問題について意思決定をおこない、地域社会を管理するケースが生まれてきている。そこで大切なことは「全員が熟議することだ」と著者はいう。

するとかつての日本の村でも、表面的なムラづきあいになんて「熟議」はひろくおこなわれた。京都の町家でも「たがいに商売敵のお町内であるのにあらゆることを熟議し管理する姿」をみて、わたしはそれを「人情の共同体ではなく義理の共同体」とよんだことがある。

本書は、日本人がつくりだした住文化というものの重要性を、改めてわたしにおもいださせてくれたのである。

建築学者 上田 篤

親鸞をよむ

「親鸞をからだでよむ、親鸞をからだの血流を通してよむ」との命題のもとに描かれた親鸞像は、著者の意図のとおりまことにダイナミックで、新しい解釈がふんだんに盛り込まれている。まず親鸞の名著『教行信証』の冒頭の部分は、著者の解釈によれば親鸞の身体から発せられた言葉と読める。

「ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」

自分たちには思いも及ばない阿弥陀如来の衆生救済の願いは、嵐の海を渡る大船のようなもので、その光明はこの世の無明の闇を破る知恵の太陽だということだ。もちろんこの意味は文字を読めばわかり、わかったところで頭で理解したにすぎない。著者はこの文章から、親鸞の肉體性を読み解く。親鸞が京都から乗った船も、敦賀から越後の直江津まで乗った船も、「罪人を流罪地に追放する非



親鸞をよむ

(岩波新書・七〇〇円)

▼やまおり・てつお 31年生まれ。宗教学者。著書に『近代日本人の宗教意識』『悪と往生』など。

からだの血流で読む深い思想

情の屈に挫かだ。方る越え苦しさをくれだ。開べ

越後したもい里か信心一人師とれたして劇的「親地をあつで血親も一がたいてい上感じて親

間親

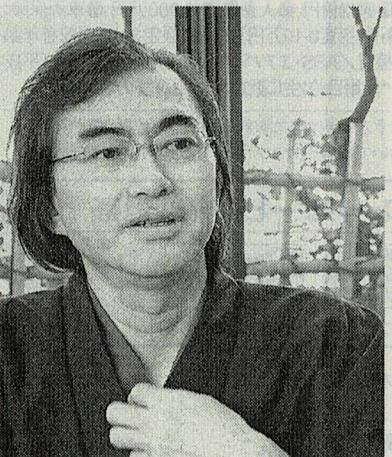
規制改革の経済分 八田達夫、

規制改革の課題は。そのなかで、本あるとおり電力自由あて、様々な角度から試みた。経済産業が各章を分担執筆し定打を欠く電力の安

あじがきのあじがきの

戦国から江戸初期にかけての武将、直江兼続を主人公とする『天地人』が、二〇〇九年のNHK大河ドラマの原作に決まるなど、注

雅志氏



(ひさか・まさし) 1956年新潟市生まれ、早大商卒。出版社勤務を経て、88年『花月秘拳行』で作家デビュー。著書に『虎の城』『沢彦(たくげん)』など。